

How Environmental Changes Affect The Age Three Child Behavior: Interviews with Child Care Providers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田, りな, 関口, はつ江 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6350

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



保育者の語りにみられる環境変化と 3 歳児の姿

池田りな¹⁾・関口はつ江²⁾

¹⁾大妻女子大学家政学部児童学科, ²⁾東京福祉大学社会福祉学部保育児童学科

How Environmental Changes Affect The Age Three Child Behavior : Interviews with Child Care Providers

Rina Ikeda and Hatsue Sekiguchi

Key Words : 保育者の視点, 保育環境の変化, 子どもの言動, 以前の 3 歳児, 以前の保育

要旨

保育環境の変化が子どもの幼稚園における生活、活動、意識に及ぼす影響について、保育者を対象としたインタビュー調査を基に考察し検討した。東日本大震災以来、福島県下の保育現場では、本調査時点において保育環境が復元したとは言い難く、その影響は自然環境を含めた園庭活動や屋外活動の制限などに根強く残っていることが明らかとなった。

また保育環境の変化が子どもに及ぼす影響については、2011 年以前にも 3 歳児クラスの担任経験をもつ保育者複数名の経験値を基に語られた内容から検討した。結果、一斉活動中心園の保育者群からは「設定活動における子どもの主体性や高揚感の乏しさ」などが語られ、自由活動中心園の保育者群からは「生活や遊び活動における子どもの自我表現や主体性の弱さ」などが語られた。子ども全体の姿として「聞き分けがいい」「お行儀がよい」「保育者の指示がよく入る」というような、一見問題のない状況があるものの、なぜそのような言動があるのかを推察する両群の保育者からは共に、子どもの内面の発達状況を懸念する語りが得られた。これらのことから、自然環境の制限を含む保育環境の変化は、子どもの内面の発達に影響を及ぼす可能性を示唆するものとして捉えることができた。

1. はじめに

2011 年 3 月に発生した東日本大震災は、東北地方を中心とした地域社会に未曾有の被害をもたらすこととなったが、福島県下においては放射能汚染による保育環境への影響と保育現場における保育者の取り組みも、多くの問題のひとつとして存在する。

記憶に残る 1995 年の阪神淡路大震災においても保育現場は大きな被害を受けた。しかし東日本大震災では阪神淡路大震災での経験を生かすことが難しい局面をさまざまに抱えている。

阪神淡路大震災との違いは、地震発生時刻が子どもたちの在園時間にかかっており、しかも保育所においては午睡からの目覚め、幼稚園では降園という時間帯であったこと、そして自然災害にとどまらず二次的な人的災害が発生したことによって、問題解決をより困難な状況に向かわせたことである。

東日本大震災の 2 か月後に開催された日本保育学会第 64 回大会では「災害における子どもと保育」をテーマに学会企画緊急シンポジウムが行われた¹⁾。日本保育学会会員では「災害時における保育問題検討委員会」が組織され、現地保育者のために学会としてできることを実施するということを目指し、岩手、宮城、福島各県において現地調査が行われた。その活動で研究者らは被災直後の局面、その後の復旧復興、保育の変化などを捉えるとともに、緊急事態のなかで日々子どもと向き合う保育者を支えるという立場をも努め、その結果は「震災を生きる子どもと保育—日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会報告書」として 2013 年 5 月にまとめられた²⁾。

2. 福島県下における保育環境問題と継続調査

上述の報告書のなかで関口 (2013) らは、放射能災害下における保育実践について「長期的な環境汚染下で保育者を支え、子どもの健全な発達のためにも取り組む立場をとりながら、保育者の取り組み・保護者の意識・子どもの実態等を客観的把握し、事実を残すこと、また保育の在り方を探り、保

育者の成長の一助とすることを目的として調査研究に取り組んだ」ことを記している³⁾。さらに、「個別的な要因では説明がつかない複合的連鎖的な関係によって、子どもに影響を与えていることが捉えられた。保育者においても、保護者においても、危機的状況への積極的な能動的な取り組みの態度、冷静な振り返り、および時間的な経過が果たす役割の重要性が指摘できる。除染活動等による放射能線量の低下があり、問題が収束したかの錯覚があるが、問題はこれからであるとの認識が必要である。異なる発達の貴重な時期に環境制限下にあった子どもたちの経験、そこでの保育者の体験、育児経験の意味、それぞれの検証はこれからである。」³⁾と述べ、この問題の長期化とその背景にある計り知れない重大性を鑑み、「今回の調査研究はさらに継続して実施する必要がある」と結んでいる³⁾。

関口らはその間に、日本保育学会企画シンポジウムⅠ「震災を生きる子どもと保育―災害下の保育施設のあり方を問う―災害時における保育問題検討委員会」(2012)、保育学会企画シンポジウムⅡ「放射能災害下における保育のこれまでとこれから―保育の原点を問い直す―災害時における保育問題検討委員会」(2013)、自主シンポジウム「保育環境の変化と保育の危機―放射能災害後の子ども、保育者、保護者における危機を考える―」(2014)の企画実施および調査研究発表を重ねている。

このような経緯のなかで、福島県を中心とする放射能災害と保育環境およびその周辺に関する問題は関口らの手によって現在も定期的に調査が継続されている。

いっぽう現地では復興がさらに進み、従来の保育環境および保育の内容が取り戻されつつある。しかし、その状況にあってもなお保育者や保護者の意識は時間的経過とともに流動的で複雑な様相を呈していることも無視することのできない事実である。

本稿では2013年より調査研究協力者として参加する池田が関口らとともに、震災発生からおよそ2年半が経過した2013年12月の時点で実施した調査結果について述べる。

3. 本研究の目的

東日本大震災発生時点に満1歳であった子どもたちとは、生活活動が屋外における散歩や探索活動へと、その活動範囲を拡大していくまさにその時期に被災した子どもたちである。その生活環境は3.11

を境に一変し、子どもたち自身には生活環境の変化について意識がないまま、生活活動に大きな制限を強いられる環境下の福島県内で育ち、2年後に幼稚園に入園している。

本研究では、そのような経緯をもつ年少児の、幼稚園入園から半年以上が経過した時点における園生活の様子について、また保育環境の制限下における保育が継続するなかで、保育者がなにを感じ、どのようにとらえているのかを、担任保育者の語りから考察することを目的とする。

4. 方法

対象：福島県下の私立幼稚園に勤務し、2013年度の3歳児クラス担任保育者複数名を対象とした。対象者は過去にも3歳児担任の経験を有している中堅以上の保育者である。

調査実施時期：2013年12月に福島県内にて1回2時間のインタビュー調査を実施した。また対象保育者の勤務する幼稚園の保育方針によって、一斉活動中心園(A群)と、自由活動中心園(B群)に区別し、それぞれへの調査は別日程で実施した。

実施方法：A群、B群ともに4人程度でテーブルを囲み、保育者のフリートークを基本とした。また語りの内容によって調査者からのインタビューも含めた。

記録方法：保育者の語りを音声録音した。

分析方法：録音した保育者の語りを文字化し、その語り内容から質的分析を行った。語り内容は、A群、B群で区別し、「園の環境」2項目、「子どもの姿」7項目の計9項目に分類整理した。

対象者の個人情報について：調査協力者は本研究の目的を了解したうえで調査に協力を得、また調査結果の公表については条件付きで了承を得た。

5. 結果

保育者の語り内容から質的分析を行った結果を上述の9項目に沿って整理した。その結果の概要を表1にまとめた。

5-1. 園の環境

(1) 屋外活動

A群、B群ともに、園庭の使用再開当初は一日に数分程度から開始したが、その後徐々に時間を延長しながら、現在は大きく改善されてきていることが語られた。

表 1 保育者から語られた内容の概要

		A 群 一斉活動中心園	B 群 自由活動中心園
園の環境	1. 屋外活動	<ul style="list-style-type: none"> ・徐々に改善 ・遊びを限定 ・自然物接触制限 ・転倒後の洗浄 	<ul style="list-style-type: none"> ・徐々に改善 ・クラス単位活動 ・自然物接触制限 ・入念な準備と洗浄
	2. 屋内活動	<ul style="list-style-type: none"> ・（以前と）差異はない 	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋狭く、視線が多く遊びに集中しにくい
子どもの姿	1. 運動機能	<ul style="list-style-type: none"> ・体力面で差異は感じない 	<ul style="list-style-type: none"> ・靴の履き替えで座位になる（立ち履き換えができない）←園庭遊びの頻度激減のためか？
	2. 精神機能	<ul style="list-style-type: none"> ・自己意識の強さに差異はない ・あきらめが早い ・落ち着くのが早い ・自分を抑えているように感じる ・今頃言うことを聴かない（入園半年後） 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き分けがいい←自分を抑えているのか？
	3. 対人関係		
	①子ども同士	<ul style="list-style-type: none"> ・異年齢交流が不足 	<ul style="list-style-type: none"> ・異年齢交流の不足 ・やりとりが入園当初見られない ・すぐに「いいよ」「ごめん」と言う ・やりとりがかみ合わない
	②保育者との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・「なんで？」「どうして？」に始まる保育者との応答が少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ・困ると何でも大人に代弁してもらおうとする
	4. 遊び体験	<ul style="list-style-type: none"> ・実体験が希薄な分、表現力に乏しい ・外遊びが短く遊び込めていない ・好き勝手をせず、規定範囲で遊ぶ ・室内飼育を喜ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・狭い中で遊ぶが「外に行きたい」と言う子は少ない ・クラス担任を中心に遊ぶことが日常 ・外遊びができないことで、逆に違う遊び体験ができた例もある
	5. 集団行動		
	①行動規範	<ul style="list-style-type: none"> ・避難訓練はパニックにならずにできる 	<ul style="list-style-type: none"> ・お行儀が良い ・保育者の指示がよくはいる ・「以前の 4 歳入園児」のような印象がある
	②クラス意識		<ul style="list-style-type: none"> ・クラスのまとまりが良い ・園庭に出ると必ず並んで担任の指示を待つ ←この行動をどのように理解すればよいのか？
	6. 主体性	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども自身の気づき、発見、達成感などを喜び感動する姿が少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ・「貸して」と言われると納得しなくてもすぐに「いいよ」と言って玩具などを手放す ・「嫌だ」が少ない ・自己主張する場面が少ない
	7. 情緒	<ul style="list-style-type: none"> ・驚いたり感じたりする部分が減ってきているように感じる ・子どもの声のトーンが「ワーッ」と高まるが少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ・音に敏感に反応する（遊んでいても心が落ち着かないのか？） ・一人になることを不安がる

A 群では園庭での遊び場所や活動を限定すること、自然物への接触を制限すること、園庭における子どもの転倒後の丁寧な洗浄、などに配慮しながら屋外活動を実施していることが話された。

一方、B 群からはクラス単位で時間をずらしながら園庭遊びを実施していること、自然物の接触を制限すること、園庭に出る前には入念な準備（長袖/長ズボン/ハイソックス/帽子等の着用）を行い、入室の際には入念な指や手腕の洗浄、着替えなどを日々実施していることが話された。入園当初の年少児は各自の生活自立が未熟であるため、単独での着替えや洗浄が困難であり、担任保育者がすべての子どもの援助を行う状況が生じるなど、従来にはないルーティンが新たに加わったことによって全員の援助を終了するまでに多くの時間を要することとなった。それにより園庭遊びを開始した当初は、園庭での実際の活動の前後における手順が煩雑になり、保育者の負担感が大きかったこと、また煩雑な手順に時間がかかったために実際に外で遊ぶ時間が削られてしまっていたことが話された。

クラス毎に時間をずらして使用する理由としては、子どもの園庭遊びに対する安全管理（おとなの目が十分に行き届く）のために敢えて子どもの人数を抑え、分割して活動する方法が講じられたことが語られた。

総じて A 群、B 群ともに屋外活動は実施されつつあるが、そこにはさまざまな制限や新たな手順が加わるなど「『従来の外遊び』という状況にはない」ということが話された。また、クラス別や時間交代制による園庭遊びであるために、以前に比べて異年齢交流が不足していることが両群の保育者から共通してあがった。

また外遊びでの子どもの姿について、A 群からは、子どもは好き勝手せずに制限範囲内で遊んでいる様子があるいっぽうで、外遊びの時間が短すぎるためか「もっと遊びたかった」と訴える子どももあり、「外で活動的に遊び込めていない印象が拭えない。そのことが一斉活動への取り組みの際の集中力に影響しているのではないか」とする、自由遊びと設定活動との関連性についての言及もされていた。

B 群からは、従来であれば園庭遊びなどにおいては子ども自身が各々遊びかたや場所を選択することが活動の主であったことを前提として、「現在はどうしてもクラス単位で担任を中心として活動する方法が多く取られている。そのためクラスとしてのまとまりは以前の 3 歳児クラスと比べて高いように思

うが、いつもクラス担任とともに活動することが子どもたちの認識の基本となってしまうている」としている。このことから「子どもの自発的な活動になんらかの影響があるのではないか」との語りがあり、子どもの主体的な活動として子ども自身が遊びを選択するという行動がみられないことが語られた。

(2) 屋内活動

A 群の一部の保育者からは、室内での遊びと子どもの様子について以前との違いはないように感じるとの感想が語られた。

いっぽう B 群からは、「一日の大部分を室内での活動にあてている状況のなかで『外に行きたい』という子どもはいないが、そのことをどのように理解すればよいのか現時点ではわからない」とし、また別の保育者からは、園舎すべてを解放しても子どもたち全員が室内活動をするには環境として狭く、他児の遊びとの距離が近すぎるため、遊んでいても保育者や他児の視線を否応なく感じてしまいやすい。「多くの視線が交差しながら遊ぶ環境では他児の遊びが気になって自己活動に集中しにくく、そのためか、一つの遊びが持続しにくい」傾向がみられることが語られた。

5-2. 子どもの姿

(1) 運動機能

A 群からは体力面では従来との差異は感じない、現在でも、屋内において運動遊びを十分に行っているため、体力への影響はないと思われることが語られた。

しかし B 群からは、体力に関して従来との差異については不明としながらも、幼稚園生活で上履きと外履きを履き替える場面における子どもの行動に触れて、「以前の、この時期の 3 歳児は立位のまま靴を履き替える（立ち履き替え）姿が日常的に見られていたが、今の 3 歳児は靴箱の前で座位になり、急ぐ様子もなくゆっくり靴を履き替えている姿が日常である」とことが語られた。この違いの背景として、以前の幼稚園生活では子どもが自身の意思で自由に室内と園庭と行き来していたため、一日に幾度も靴を履き替える動作をする機会があった。そのことによって以前の 3 歳児は無意識のうちに素早い脱ぎ着の動作が体得されていき、立位姿勢での着脱を可能にしていたのではないかと。現在の幼稚園生活では園庭遊びは決まった時間に一日に 1 回程度であるため、靴を着脱する回数が激減したことが影響しているのではないかと、との推測もあった。

(2) 精神機能

A 群からは、自己意識の強さに従来との差異はないとする保育者もいる一方で「あきらめが早い、園生活が落ち着くのが早い、自分を抑えているように感じる」などが語られ、また入園当初は落ち着くことが早かったが（慣れてきたためか）今頃（12月）になって保育者の言うことを聞かなくなっている子どもがいるという状況も語られた。

B 群からは、「とにかく以前の年少児に比べて聞き分けが良いように感じる」ことがあげられ、「この傾向が良いことなのかどうかはわからない」との戸惑う思いも話された。

このように本項目については、A 群、B 群ともに、子どもの姿を捉える傾向に共通性が見いだされ、とくに A 群からは「自分を抑えている」のではないかと、との推察につながるような見解が多く示された。

(3) 対人関係

① 子ども同士

A、B 両群の共通項として、異年齢交流の機会が明らかに不足していることがあげられた。

B 群からは、子ども同士のやり取りの少なさとともに「子ども相互のやり取りが噛み合っていない」ことが上げられた。子ども同士のやり取りは入園当初にはほとんど見られず、徐々に増えてきてはいる。しかし「物の貸し借り場面においてすぐに『いいよ』と言い差し出す姿に従来の3歳児との相違を感じる」ことが語られた。また、3歳児がすぐに『ごめん』という姿に「何か腑に落ちないものを感じる」と、保育者からの違和感が語られた。

② 保育者との関係

A 群からは、カリキュラム活動において、従来は保育者と子どもとのやり取りが活発であり『なんで?』『どうして?』『あ、わかった!』という子どもの言葉が多く聞かれたが、現在では「そのような子どもの質問などから始まる保育者との応答性が少ない」ことが語られた。

B 群からは、①の子ども同士のやり取りの少なさに関連することとして、自分で他児に直接関わろうとする行動が少なく、「他児とのやり取りに困るような状況になると、すぐに保育者を頼り、保育者に代弁・代行してもらおうとする」傾向が強いことがあげられた。

(4) 遊び体験

A 群からは、外遊びの時間が短く、子どもが遊び込めていないという印象を受けること、それとともに

に「子どもの遊び活動に裏付けられる実体験が従来に比べて少ないためか表現力に乏しい」ことがあった。また室内飼育を喜ぶ姿や、3歳児であつても園の決まりを守り、好き勝手をせずに規定範囲で遊ぶ様子が語られた。

B 群からは、外遊びができずに「室内、体育館などで遊ぶうちに折り紙や縄跳びなどに興味をもって取り組む姿もあり、これは従来自由に外で遊んでいたときにはあまり見られなかったうれしい点」として話される一方で、「従来であれば室内・屋外を自由に行き来し、ひとりひとりの子どもが自分で遊びを選択していた状況があるはずだが、現在はさまざまな制約の中で活動するため、どうしてもクラス担任を中心としてクラス単位で活動することが日常となっている」ことが語られた。また、室内の狭い中で遊ぶ状況においても『外に行きたい』と言う子どもは少ないことがあげられ、その背景にある理由として「屋外は怖く危険な場所」とであるという認識が強いのではないかと。幼い頃から大人の判断に従って生活してきた体験があつても自分自身で判断して自由に屋外で行動する経験が極端に少ないためではないか」などさまざまな推察が話された。子どもが『外に行きたい』と言わないことに対して保育者が理解に苦しむ様子が語られた。

(5) 集団行動

① 行動規範

A 群からは、定期的に行われる避難訓練において、子どもがパニックにならずに落ち着いてできる様子があげられた。

B 群からは、「お行儀がよく、保育者の指示がよく入る」姿が話され、保育者からは一様に「以前の4歳入園児のよう」だとその印象があがっている。

② クラス意識

B 群から、「(年少児であるにもかかわらず)クラスのまとまりがよい、園庭に出ると保育者が指示しなくても必ず整列しクラス担任の指示を待つ姿がある」ことが話され、「このような行動は従来の年少児では見られない」とともに、3歳児という年齢における発達の観点から自我形成面について懸念があることが語られた。

(6) 主体性

A 群の保育者からは、「子ども自身の気づきや発見、活動の達成感などを喜び感動する姿が少ない」ことが語られた。

B 群からは、自己主張の弱さについて『いやだ!』という場面が少ない点、(前述の)物の貸し借り場

面において『貸して』と他児に言われると自分で納得していないのにもかかわらず『いいよ』と言って手渡す姿が語られた。「従来の3歳児では自我表現が活発で子ども同士の自我がぶつかり合い、いざこざが頻繁に起きていた」状況を考えると、(5)－②と同様に、自我形成と主体性の発達状況について、従来の3歳児との相違の見解が語られた。

(7) 情緒

A群からは、子どもが驚いたり感じたりする部分が減ってきているように感じ、「子どもの気持ちの高揚感に伴う歓声(「わー!」という感動や驚きの歓声など)が少ない」ことがあがっていた。

B群からは、子どもたちがそれぞれ自由に楽しそうに遊んでいる場面においても、大きな音(車や飛行機の騒音など)がすると敏感に反応し「先生、地震?」と不安そうな表情をする、他児や保育者が居ない場所で「一人で遊ぶことを嫌がり不安がる」ことが語られた。

6. 考察

(1) A群の保育者の視点 一保育カリキュラムの視点から語る「設定活動における子どもの主体性や高揚感の乏しさ」一

一斉活動中心園の保育者(A群)からは、自然物などに対する子どもの実体験に基づいた保育活動の展開がされにくいこと、子どもの実体験に基づく疑問などを通して生起する子どもの発見や喜びなどに伴う気持ちの高揚が乏しいことなどが語られた。これらはB群では語られておらず、A群保育者の視点の特徴と捉えることができるが、それは項目「(3)対人関係②保育者との関係」「(4)遊び体験」「(6)主体性」「(7)情緒」に関連する語りに示されている。

たとえば、従来であれば「サツマイモの絵を描きましょう」という活動の背景には、畑で育てたサツマイモを収穫するという実体験があったため、子どもは、その体験から収穫の際の感触、土を掘って出てきたサツマイモの形、色、大きさ、重たさなどを含めて、後日その感動を生き生きと絵画に表現していた。しかし、現在では、サツマイモを育てて収穫するということが環境制限によりできないために、子どもはその体験がないままに机に置かれたサツマイモを写生する。その活動からは、子どもの関心、子どもの高揚感などが湧きにくく、結果として主体的に活動に取り組みにくいのではないかという推察

であった。

これらの視点から、保育者からは「活動場面のなかで子どもが驚いたり感じたりする部分が減ってきているように感じる」、「子どもの声のトーンが高まること(活動に夢中になる状況)が少ない」などが話され、保育者は、保育者の設定した活動に子どもが主体性をもって取り組む姿が減少したという印象をもっていることがわかった。それらは「保育計画という日々のカリキュラムを実施していく上で、従来の子どもの姿との違いとして認識され、またそれは保育者側のやりにくさ」として語られた内容と解釈することができる。

日々の保育活動において保育者側が活動を設定し提供することで保育を展開することの多い一斉活動中心園の保育者にとって、以前の子どもの姿との違いを感じた瞬間として設定活動場面における子どもの主体的な取り組みの差異が率直に語られたものと考えることができる。

(2) B群の保育者の視点 一子どもの自発的活動を尊重する視点から語る「生活や遊び活動における子どもの自我表現・主体性の弱さ」一

自由活動中心園の保育者(B群)の語りからは、子どもが自身の気持ちを直接相手に表現することや他児とかかわる中で自己主張しようとする姿が少なく、他児とのいざこざが見られないこと、自分で他児と交渉するのではなく保育者を頼ること、などが語られた。これらはA群からは挙がっておらず、B群の視点の特徴であると捉えることができる。それは、「2. 精神機能」「3. 対人関係①子ども同士・②保育者との関係」「5. 集団行動②クラス意識」「6. 主体性」に関連する語りに示されている。

たとえば、昼食時に「先生、僕の座る椅子に〇〇君が座ってる…」と保育者に訴えにくるなど、直接交渉するのではなくすぐに保育者を頼り解決してもらいたがる場面が多いことが話された。その中で「子ども同士のやり取りがちぐはぐで噛み合わないように見受けられる」こと、すぐに「いいよ」「ごめんね」と言うが、果たしてそれが本人の納得の上での言動であるのかが疑わしいことも多いことが述べられた。さらに、以前の3歳児であれば「自分が欲しいからイヤだ」「今、使っているからダメ」というように、玩具などは簡単に「いいよ」と手放すことはせずに、「いやだ!絶対に渡さない」という自己主張が多く見られたことが話された。「3歳児は自己主張するためいざこざが生じることが当然」ととらえていた保育者にとって、おとなしくす

ぐに「いいよ」と玩具を相手に差し出してしまう姿をどのように理解すればいいのか困惑している様子もみられた。

また、子どもの主体性を尊重し、子どもが遊びを選択する自由遊びを主としている保育の場合、従来では園庭活動は子どもの選択が基本となっており、園庭で遊びたい子どもは保育者の所在などを気にすることなく勢いよく園庭に飛び出し自分から好きな遊びに入ってしまう姿が見られた、とし、しかし現在では保育環境の制限があるため、やむを得ずクラス単位での活動が多く、保育者が中心となる活動に傾倒しやすい状況となっている。そのような日々の生活体験からか「保育者が『園庭に出るよ』と言うと靴を履き替えた子どもから自然に整列して担任が来るのをおとなしく待っている姿」や「今日はこれで遊ぼう」と保育者が促した遊びを保育者を中心にしてみんなで遊ぶ姿があることが話された。それを保育者の指示を待つ子どもの姿であると解釈すれば、子どもが自分自身で遊びを見つけて選んでいく力の育ち（主体性）が以前の3歳児と比べて弱いのではないかと保育者が不安を抱くことは、子どもの自我形成と主体性の育ちを重視する自由活動中心園の保育者のとらえ方として、当然の視点であると考えられる。

(3) A 群、B 群、両者の語る子どもの姿にみられる視点

本調査では、A 群、B 群から語られる子どもの姿には共通性も多く見られたものの、従来の子どもの姿との相違点と感じるところ、および保育者が懸念する点として挙げられる内容の視点が、両群では異なるものも認められた。

一斉活動中心園 A 群の保育者では活動場面、つまり保育カリキュラムの視点から子どもの姿が語られ、一方、自由活動を中心とする B 群の保育者では子どもの日常生活場面における自我表現の視点から子どもの姿が話されており、「環境の変化による保育の変化が子どもに与える影響」という捉え方には差異があることが認められた。

しかしながら、A 群 B 群それぞれの視点から語られていた内容には、子どもが活動を楽しみ主体的に取り組む力、子どもが自己表現を通して他児と主体的にかかわろうとする力、生活や遊びという活動の中で自分が選択して主体的に行動する力というように、子どもの言動の奥底にある「主体としての自己」を捉えて語られていると考えることもできる。このことによって、両群の保育者の子どものとらえ

方には共通するものが存在すると理解することができる。

7. 今後に向けて

(1) 子どもが環境を認識していく過程

今回の調査からは、保育者から「表面的には問題もみられない」とされながらも子どもの姿として「聞き分けがよく、反面、自己主張は弱い姿」や「遊びの体験が少ないためか提示された遊びにも集中できにくい姿」などの3歳児像が浮かび上がった。

この結果にみられるような「保育者が感じ考える子どもの姿の変容」は、震災ということを経験し、とも時代的変遷や社会情勢の変化によっても生じるものでもあるといえよう。

しかしながら、「子どもが自己を十分に発揮する」ように環境を整えること、「子どもの主体的な活動」を促し支援することが幼稚園教育の基本であり、それらの力を子どもが獲得していく過程で保育者の援助や環境が必要であることは言うまでもない。

子どもの自己が発揮されやすい環境や子どもが主体的活動に取り組みやすい環境を整えるための要素のひとつとして、保育環境において屋外存在が大きいことは明らかである。前述したように、今回対象となった年少児は、2011 年初頭、ようやく歩行が可能となり日々の生活がまさに屋内から外へと拡大し始めたときに震災が発生し、生活と遊びの場を屋外から屋内に引き戻されることを余儀なくされ続けた経緯を背景にもっている。以降、自然に触れることを含め日常的に屋外遊びの体験をする機会がほとんどないまま、幼稚園へ入園したという経緯を考慮するとき、1, 2 歳児における日常的な外遊びの体験の欠落が、保育者に「従来の3歳児となにか違う」というような印象を与える要因のひとつとなっていることが考えられる。またこのことは、1, 2 歳児における屋外遊びや他児とのかかわりの体験不足を、幼稚園入園後に改めて体験しなおすことの重要性をも示唆しているとも考えられる。

幸いなことに今回の調査対象である3歳児は、震災当時の恐怖体験に関する記憶はないとされる子どもたちであり、自然環境や遊び環境の喪失感や環境変化によるストレスが生じているとは考えにくい。しかし、子どもたちの園生活では「先生〇〇やっぺいいい？」といちいち保育者に確認を求めたり、「園庭では自ずと整列して保育者の指示を待つ

ている行動」がみられるなど、あたかも目に見えない大きな危険や恐怖を絶えず意識し気にしながら生きている子どもの姿がそこにあるようにも感じられる。それは子ども自身に震災の恐怖体験や記憶はなくとも、その後の生活のなかでいつからか「屋外は目に見えない危険がたくさんあり、大人の言うことを聴くもの・勝手に行動しないもの」という意識が形成されていることが推測される。

保育者の語りのなかに、「ある子どもが園庭で転倒した。運動神経が比較的良いと思われる子どもでもあるにも関わらず、どういうわけか転ぶ際に手が出ずに顔面を地面に強く打ち大きな怪我をした。なぜ、その子は両手が出ないまま転倒をしたのかしばらく理由がわからなかったが、もしかしたら保育者がいつも『土に触ってはいけない』と言い続けてきたため両手を出せなかったのではないか、という意見が保育者からあがり、子どもの安全を思うがために保育者が言葉をかけ続けた行為が、子どもが環境を認識していく過程において周囲の大人の予想以上に大きな影響と意味をもたらしているのではないかと反省した」との語りがあった。

幼児が幼稚園という身近な環境を認識しながら成長していく過程における保育者の言葉の影響は大きいことはいうまでもないことである。また子どもが毎日活動する保育環境の中に「危ないもの」「触ってはいけないもの」が少なからず存在するということが子どもの環境認識や世界観の形成にもたらす影響についても、今後の考察が望まれよう。

(2) 保育環境が子どもにもたらす意味

無藤ら⁵⁾は、子どもの環境への関わりやその意味は時間的経過や体験の蓄積によって変化していくことを次のように述べている。

はじめの段階として「その環境へ繰り返し関わることを通してそこにある事物や人へのあり方に気づいていく、それが環境を知ることであるが、園環境がこの世の中全体の環境の小さなモデルであるとすれば、それは子どもにとってこの世の中、この世界について知ることの始まりであり、この世の中での主要な種類の場所が子どもの関わる園の中やその周辺に成り立っていることが望まれる⁶⁾」としている。また、子どもが環境を受け取る段階から子ども自身が環境をつくり出すことへの変化について、「子どもは最初のうちは、なお受け身であり、見たり、発見したり、驚いたりして日々環境の働きに接していく」が「次第に子どもたちはそれらの事象に愛着を抱き、安心できるところで自ら新しいもの

をつくり出していき、園環境のごく一部ではあるにしても、環境をつくり出す主体としての生き方を子どもは学ぶのである⁷⁾」としている。

これらのことは、環境としての園庭が子どもにとって「安心できる場所」「何をしてもよい場所」と認識されていなければ、子どもは自由に活動することには至らないことを意味すると考えられる。園庭あそびにおいて「外遊びをするときには土に触ってはいけない」「シートを被せてあるところでは遊んではいけない」「転んだらすぐに手をよく洗うこと」など、「してはいけないこと」「危ないこと」が遊びの場に存在する環境は、子どもが安心して自由に活動できる環境とは全く異なるものであると言わざるを得ない。

園庭や保育室の環境が子どもの安心できる場所ではない以上、子どもは環境をつくり出す主体としての在りようを獲得することが難しいということが推察される。このことと、A 群の保育者の語る「活動に主体的に取り組みにくい子どもの姿」や B 群の「自我表現の乏しい姿」、また両群からの「聞き分けがよい姿」などとの関連性についての検討もおこなうことが望まれる。

現在も日々保育の営みは行われ、その活動のなかで保育者は戸惑い、葛藤しながらも幼稚園生活において子どもたちと共に前へ歩みをすすめている。保育環境の制限、とくに自然環境の制限が保育に与える影響と子どもに与える影響との関連性について今後も考察を継続していきたいと考える。

＊本研究調査は文部科学省科学研究費（基礎 C）課題番号 80348325 の助成を受けて行われた。

＊本稿は、日本保育学会第 68 回大会における発表内容にあらたな考察を加えた。

【引用文献】

- 1) 「災害における子どもと保育」日本保育学会第 64 回大会 学会企画緊急シンポジウム、企画・司会者：関口はつ江（東京福祉大学）、島田ミチコ（関西学院大学）、話題提供者：野呂アイ（修紅短期大学）、生駒恭子（とうほく幼稚園）、米田芳恵（北須磨保育園―神戸―）、井出浩（関西学院大学）、指定討論者：首藤美香子（白梅学園大学）、会場玉川大学、2011
- 2) 一般社団法人 日本保育学会編「震災を生きる子どもと保育」―日本保育学会 震災時における保育問題検討委員会 報告書― 全 258 頁、

- 日本保育学会, 2013
- 3) 前掲 2) 関口はつ江, 賀門康博, 加藤孝士, 長田瑞恵, 田中三保子, 音山若穂「放射能災害と保育問題―福島県を中心に―」一般社団法人日本保育学会編「震災を生きる子どもと保育」―日本保育学会 震災時における保育問題検討委員会 報告書― 日本保育学会, 2013, p 75-210
 - 4) 池田りな, 長田瑞恵「環境変化による保育の変化が子どもに与える影響 (2)」日本保育学会第 68 回大会, 発表要旨集, 2015
 - 5) 無藤隆, 倉持清美, 柴坂寿子, 田代和美, 中島寿子, 島崎正行「園環境は子どもにとってどのような意味を持つか」保育学研究, 第 31 巻, 1993, 113-122
 - 6) 前掲書 5) p 117
 - 7) 前掲書 5) p 117
- 保育―災害下の保育施設のあり方を問う―」日本保育学会第 65 回大会 発表要旨集, 2012
- 2) 澤井洋子, 滝田良子「災害後の保育所保育の変化と課題Ⅰ―保育所のあり方と危機管理―」日本保育学会第 65 回大会 発表要旨集, 2012
 - 3) 関口はつ江, 加藤孝士, 澤井洋子, 滝田良子「災害後の保育所保育の変化と課題Ⅱ―保育所の取り組みと保護者の意識―」日本保育学会第 65 回大会, 発表要旨集, 2012
 - 4) 日本保育学会企画シンポジウムⅡ 災害時における保育問題検討委員会「放射能災害下における保育のこれまでとこれから―保育の原点を問い直す―」日本保育学会第 66 回大会 発表要旨集, 2013
 - 5) 災害時における保育問題検討委員会企画シンポジウム報告「放射能災害下における保育のこれまでとこれから―保育の原点を問い直す―」保育学研究 第 51 巻第 3 号, 2013
 - 6) 自主シンポジウム「保育環境の変化と保育の危機―放射能災害後の子ども, 保育者, 保護者における危機を考える― 日本保育学会第 67 回大会 発表要旨集, 2014

【参考文献】

- 1) 日本保育学会企画シンポジウムⅠ 災害時における保育問題検討委員会「震災を生きる子どもと

Summary

In this study, child care providers in charge of three-year-old children at five private nursery schools in Fukushima Prefecture, where restrictions have been placed on outdoor play and interaction with nature, were interviewed to gather information on how such environmental changes may affect child behavior.

Interviewees who work at nursery schools where the curriculum is centered on teacher-led group activities reported increased difficulty in raising children's motivation and satisfaction in task-focused activities. They indicated that they felt one possible reason for this could be insufficient opportunity for the children to gain diverse experiences through play. The other interviewees, who teach at nursery schools where greater emphasis is placed on spontaneous child-led activities, said that one change they noticed was that there seemed to be an increase in the percentage of three-year-olds who, on the surface, come across as quiet and well-behaved. They said that this change could be associated with a decrease in the ratio of children who display the level of self-expression typically expected of three-year-olds.

These and other observations from both types of nursery schools suggest that child care providers are concerned that restrictions on the child care environment may be affecting the development of children's motivation and initiative.